日本近代文学大系　47

明治短篇集

解説　吉田精一
注釈　興津　要
　　笹淵友一
　　三好行雄
　　吉田精一
　　伊狩　章
　　福田清人
　　坂本政親

角川書店

日本近代文学大系　全60巻　　第47巻　明治短篇集

昭和45年5月10日　初版発行

注釈者代表　吉田精一
発行者　角川源義
印刷者　中内佐光
製本者　鈴木俊一

別巻引換券は最終回配本まで
保存しておいて下さい。

発行所　株式会社　角川書店（かどかわしょてん）

東京都千代田区富士見2—13—3
電話東京（265）7111〈大代表〉
振替東京 195208
郵便番号　102

落丁・乱丁本はお取替えいたします　　暁印刷・鈴木製本

目

次

凡例　五
明治短篇集解説　吉田精一　九
明治短篇集注釈
饗庭篁村
三筋町の通人　興津要　五
矢崎嵯峨の舎
初恋　笹淵友一　六
山田美妙
武蔵野　三好行雄　九
斎藤緑雨
かくれんぼ　吉田精一　二五
宮崎湖処子
帰省　笹淵友一　三九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

川上眉山　書記官　伊狩章　二三三

広津柳浪　今戸心中　伊狩章　二六一

小杉天外　楊弓場の一時間　伊狩章　三二九

小栗風葉　世間師　伊狩章　三三三

鈴木三重吉　千鳥　福田清人　三六一

森田草平　初恋　福田清人　三九五

真山青果　茗荷畠　坂本政親　四三五

加能作次郎　坂本政親　四三
恭三の父
補注　四八
参考文献　五三
年譜　五六

凡例

一、本書は、饗庭篁村の「三筋町の通人」、矢崎嵯峨の舎の「初恋」、山田美妙の「武蔵野」、斎藤緑雨の「かくれんぼ」、宮崎湖処子の「帰省」、川上眉山の「書記官」、広津柳浪の「今戸心中」、小杉天外の「楊弓場の一時間」、小栗風葉の「世間師」、鈴木三重吉の「千鳥」、森田草平の「初恋」、真山青果の「茗荷畠」、加能作次郎の「恭三の父」、計一三篇の小説を収録した。

一、本書は、解説・右の作品本文・本文に関する注釈（頭注および補注）・参考文献・年譜をもって構成した。

一、本書に収録した本文はすべて作品の全文であって、それぞれの底本に関しては、収録作品順に左に掲げる。

○「三筋町の通人」（饗庭篁村）は、「むら竹」第四巻（明24・1、春陽堂刊）を底本とした。変体がなは、原則として平がなになおした。送りがなで不適当と思われる個所は、多少の訂正をほどこした。また、明らかに誤植と思われる個所は訂正した。

○「初恋」（矢崎嵯峨の舎）は、『二葉亭四迷集・嵯峨の屋御室集』（「現代日本文学全集」第一〇巻、昭3・10、改造社刊）を底本とし、「都の花」（明22・1）初出の本文（署名、嵯峨のやおむろ）を参照した。用字・かなづかい・段落・句読点など底本に従うことを原則にしたが、会話の部分を示す括弧のつけ方に不統一があるので、欠けていると認められるものは補った。句読点のうち、、点は、明治二二、三年当時の、セミコロンを意味する表記法として歴史的意義があるので保存した。注釈は典拠・作品批評・作品の背景等に重きを置き、特にツルゲーネフの『初恋』との構想上の比較に留意した。ツルゲーネフ『初恋』の引用は米川正夫訳岩波文庫本によった。

○「武蔵野」（山田美妙）は、『現代名作集』㈠（「現代文学大系」63、昭42・11、筑摩書房刊）を底本とした。ただし底本は新漢字旧かなになっているので、旧漢字旧かなとした。明らかに誤記もしくは誤植と思われる個所は若干訂正した。

○「かくれんぼ」（斎藤緑雨）は、『斎藤緑雨集』（「明治文学全集」28、昭41・2、筑摩書房刊）を底本とし、初版本（『文学世界』第六巻、明24・7、春陽堂刊）と対校して、底本の若干のミスを改めた。

○「帰省」（宮崎湖処子）は、初版本（明23・6、民友社刊）を底本とし、再版本を参照した。明らかに誤植と認められる個所は再版本を参照して訂正した。また正俗両字体の混用の場合は正字に統一し、変体がなは平がなに改めた。動詞活用の誤り、動詞・助動詞の接続の誤りなども正した。送りがなの不足についても不統一と認められる場合は補った。本文中、地名・外国人名にはそれぞれ傍線＝および―を付けているが、まま漏れている場合もあるので補った。

○「書記官」（川上眉山）は、「太陽」（明28・2）に初出のものを底本とし、『眉山全集』第一巻（明42・7、博文館刊）を参照。変体がなや明らかに誤植と思われるものは訂正した。

○「今戸心中」（広津柳浪）は、『広津柳浪集』（「明治文学全集」19、昭40・5、筑摩書房刊）を底本とし、「文芸倶楽部」（明29・7）に初出のものおよび『柳浪叢書』前篇（明42・12、博文館刊）を参照した。原則として変体がなは平がなに改め、明らかに誤植と思われる個所は訂正した。

○「楊弓場の一時間」（小杉天外）は、短篇集『草笛』（明42・11、秀英舎刊）を底本とし、「新小説」（明33・7）に初出のものおよび『小杉天外・小栗風葉・後藤宙外集』（「明治文学全集」65、昭43・10、筑摩書房刊）を参照した。変体がなは平がなに改め、明らかに誤植と思われる個所は訂正した。

○「世間師」（小栗風葉）は、「中央公論」（明41・10）に初出のものを底本とし、『小杉天外・小栗風葉・後藤宙外集』（「明治文学全集」65、昭43・10、筑摩書房刊）を参照し、若干本文を訂正した。変体がなは平がなに改めた。

○「千鳥」（鈴木三重吉）は、『千鳥』（「三重吉全作集」第五編、大4・8、春陽堂刊）を底本とし、『千代紙』（明40・4、俳書堂刊）および『現代名作集』㈠（「現代文学大系」63、昭42・11、筑摩書房刊）を参照した。

○「初恋」（森田草平）は、『名作集㈠明治篇』（「日本文学全集」69、昭37・12、新潮社刊）を底本とした。明らかに誤植と思われる個所は訂正した。

○「若荷畠」（真山青果）は、『青果集』（明40・12、新潮社刊）を底本とした。漢字の俗字を正字体に改め、ルビの誤りを正すなど、若干手を加えた個所もある。注釈の表記は、新字体新かなによることを原則としたが、たとえば題名中の「畠」など一部旧漢字を残したものもある。

○「恭三の父」（加能作次郎）は、『世の中へ』（大8・2、新潮社刊）を底本とした。漢字の俗字を正字体に改め、ルビの

誤りを正すなど、若干手を加えた個所もある。

一、本文の表記は、かなづかい・漢字・段落、句読点や符号の用い方など、原則として右底本に従ったが、読者の便宜のため、底本にないルビを新たに付する際は、（　）で囲んで、それが注釈者の判断によってふられたルビであることを示した。なおこの場合のルビの表記も、本文に従い旧かなづかいによった。

一、注釈は、見開き二ページごとに、本文の部分に一、二、三……の番号を付した上で、それぞれについての頭注を、各ページ上段に収めた。頭注では十分に注しえないものについては、↓印を付して、補注で述べることにした。（なお「帰省」では、頭注のはみ出した部分は作品末尾に各ページごとに一括して収めた。）

一、本文を除く表記は、新字体新かなづかいによることを原則としたが、引用文ではかなづかいのみ原文のままとした。

一、注釈中の数字は、引用文を除き「十二」「二百三」とはせず、「一二」「二〇三」のように表記した。ただし、年号を（　）の中に入れる場合は洋数字により、（明23・3）（大14・10）のように示した。明治以降の年号にかぎっては、それぞれ、明、大、昭と略記した。

一、注釈で各種文献から引用し、または文献にふれて言う場合、単行本は『　』、新聞・雑誌および作品の題名・論文名などは「　」で示した。

一、注釈では、頭注は単なる語注はできるだけ抑制し、作品の背景、作品の発想、文体・構成・主題の把握にかかわる事項注を重視した。補注はさらに発展させて作品の性格・成立事情・モデルや素材に関する考証、先行文献の検討など作品論の領域に及び、頭注で客観性を旨としたのに対して、個人的な見解を打ち出した部分もある。

一、作品の収録順序は、各作家の文学史的位置に従い、その主要な活動時期をもとに定めた。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

解

説

明治短篇集解説

吉田精一

饗庭篁村

明治最初期の混沌とした時期にあたって、世間のいやしむ小説に従い、西洋文学の息のかかった近代文学の成立までの期間をわずかにもちこたえたのは、主として戯作者系統の作家である。その随一を饗庭篁村とする。

篁村は江戸下谷の質屋に生まれ、少年時から劇・遊芸・俳諧に親しみ、また江戸小説類を耽読した。明治七年から日就社（「読売新聞」）に入社し、はじめ、校正方、のち記者としてつづき物に筆をふるった。幸田露伴は明治初期の二文星として、篁村と須藤南翠とをあげているが、二人とも創作の量としては、彼らと雁行して新文学の開祖となった坪内逍遙よりはるかに多かったのである。

篁村の初期の作品は「むら竹」（明治二二―二三年）一冊に収められている。彼は最も八文字屋本を愛し、「明治の其磧」と称されたが、他にも秋成・三馬・一九・京伝・種彦らを慕い、また西鶴・近松にも近づいた。文章は軽妙洒脱で、戯謔滑稽に長じ、三面記事から材を得たような人物事件を、縦横に駆使する才能に非凡のものがあった。

彼は壮大な結構をかまえ、場面の変化を按配する長篇小説家ではなかった。戯作者から出発した人としては珍しく、読者心理をあてこむきらいは少なく、「自ら語らんと欲するところを語り、歌はんと欲するところを歌ふ」（露伴）詩人気質の持ち主であり、しばしば情趣風懐を自然に流露することに成功を収めている。

西鶴は必ずしも篁村が熱愛した作家とはいえない。篁村は根が勧懲主義を奉ずる常識的なモラルの信者であるが、しかし彼もまた明治二〇年前後の西鶴復興には参加した一人であった。そして、おそらく近代小説の上で、最初に西鶴の影響を創作上に示した作家は彼であった。「当世商人気質」（明治一九年三月より「読売新聞」連載）がそれである。この作品における『日本永代蔵』の感化のあとについては、私は別に指摘したことがある（「現代文学と古典」）ので、ここには再説しない。ついで『蓮葉娘』（明治二一年）も『好色一代女』に模したあとがあるが、もちろん西鶴の執拗な写実力や、鋭い直観に欠けている。もともと粋と通とをまぶして、軽妙な諷刺を主旨とするのが、篁村のお家芸であった。

篁村には人間の個性を典型にまで描きあげる力はなかった。むしろ一つの「くせ」にすがり、「型」として類型として描くという行き方であって、この点で、彼は明治の「気質（かたぎ）」作家であった。したがって彼は時にしばしば旧様式をもって新時代を描いた。『当世商人気質』などもその一つで、明治の商人を明治の資本主義社会のもとに描いたものでなく、多少の新しい意匠はあるものの、其磧風の眼鏡を借りて、明治時代を眺めたというおもむきがつよい。女性を描く場合もそうで、「脳中に根蔕を作れる旧時の理想をもて今の社会を観察する故に」（内田魯庵「饗庭篁村氏」）、新時代の女性を内面に立ち入って描けない。世に彼の「第一傑作」とも称された『蓮葉娘』も三面雑報的で、「外界に就ての観察は富みたれども内界の変化に至っては毫も観察せし跡なきが如し」（同上）ということになるのである。

にもかかわらず、当時第一の批評家というべき魯庵が、宮崎三昧、条野採菊、はては篁村と併称された南翠までも、江戸戯作の風体趣味を受けつぎ、遊戯文字をあやつる連中としてはっきり軽蔑したのに対し、篁村に対してのみは、他にない「篁村先生」「篁村翁」と敬称を付し、「文豪」「諷刺家としての第一人」「アヂソンと其磧を混和せる古今の妙絶」などと賞賛して止まない。それはたんに自分と霊犀相通うものを篁村に見出したからのみではなく、遊戯通俗とことなる文致風格を篁村に感じていたからであろう。

さて「三筋町の通人」は彼の代表作の一である。この作品でまず目につくのは、洒落のめした文章のおもしろさである。たとえば、

「石榴はポンと膝をはたいて其手で腰の煙草入を抜きトキニといふをキツカケに音のする角彫（つのぼり）の筒より早いを自慢か脂（やにと）止めの煙管を取出しソレ君も御承知のと云ひかけて手焙りの火鉢を引寄せ例の隠れ家へネで切ッて煙草を吸ひつけ火鉢の

縁をトンと叩いてドウモ君に見せたい嬋妍窈窕たる者が顕はれやした実にお目に掛けたいよと云ッて羽織の紐を結び直す真似をしてわざと跡を云はずに澄し切ッて居るといふ総て容体を写すに余ほど手数が入谷の石榴子」

などという、落語家の語り口を思わせるような、巧妙な筆の運びであろう。

ただしかしそれならこの通人なるものが活写されているかというと問題である。魯庵が評したように、それは半熟通人という一個の性格にすぎない。といってその一個の全体を知って描いたともいえない。「通人社会を貫く心理の弊竇及び生涯の運命に到つては未だ全く尽さざるものあり。忌憚なく云へば篁村氏は唯だ一箇性格をだに猶ほ透徹して洞察する識を養はざりしなり」。結局その意味では文化文政度の半可通氏以上に及ばないのである。

とはいっても明治文壇随一のユーモリストであり、またサチリストであるおもむきは、この「三筋町の通人」にも見られないではない。しかしユーモアとは日本の茶番狂言式の滑稽をいうのではない。真摯な筆で人間の具備する半面の欠陥を描写し反省させることを目的とする。もっとむつかしくいえば、冷徹きわまる直観が、人間性の内奥に向かって、鋭い視線を投げ入れることで、個人の欠陥や弱点を、必ずその背後の人生と世界の全体性に内在する欠陥や弱点にまで、還元することを必要とする。

ところが、篁村のユーモアないし諷刺は、「読んで眼底に涙を催ほし来るものを見ず、又極めて冷酷に根強く人間を痛罵せしものあるを知らず、又人間の最も美しき側面若くは其理想世界を描き出せしものあるを見ず」、すなわち、社会および人間に対する深い同情と同感を欠いている。さらにいえば、深刻な社会的思想・観察にとぼしい、と魯庵は正しく評している。

篁村の長所は、要するに天成というべきその文章の洒落滑稽をつくすところにある。それだから小説よりも旅行記の方がおもしろい。現代でも彼の紀行文を絶賛する福原麟太郎氏のごときがある。彼の手紙はまた不用意のうちに天分を発揮した逸品であって、逍遙は「明治の書簡文名家の随一」と評していう。「頭から洒落づくめの書簡でさえ、少しの無駄もなく、無理もなく、嘘もなく、全文が簡潔に心地よく引締つて、時儀、恒儀悉く備わり、何もかも行届いている。少くとも此四十年来私が受取つた書簡の中で、君のように垢抜けのした、而も少しも拵えた痕のない、殆ど芸術的といってよい手紙は外にはない」（「饗庭篁村氏」逍遙選集第十二巻所収）

彼はまた劇評家として屈指の存在であった。この方は柔らかなうちにちくりと針を蔵して、できるだけほめようとしてほ

めそこなっているところに自然のおかしさがある。その一例を次にあげておく。

「出ませい〳〵、大作出ませい、新脚本出ませいと手を取て引立るやうに、学者達が世話をやかるれども、こそはゆがッてか新作は出ず。出かけた新作も是ほどにしてお待兼の中へニュースーと焼火箸を水に入れたる体にては面目なしと引込気、此しばらく妙作の大脚本出まする間の繋として、世に現るゝ古狂言、旧演劇の身代限、選択もなき綴合せ、あらひざらひを並べ立て、此うち何如ぞ御意に入らばの古着棚、錦だらけの目ばゆさはこれ演劇の盛兆か、観古とか温故とか演劇の上に字が付くは目出た過たる事共なり。（略）

陣屋物語の場団十郎の熊谷秀調の相模、（略）左団次の弥陀六見出しになりてッカ〳〵と舞台へと立戻り踏段へ足をかけ義経の顔を屹度見て恨を述べるところ勢ひよし。勢よすぎて濛雲国師の暴れたるごとし。権十郎の義経よし。義経よりは鎧がよし。弥陀六を呼び返し爺よ堅固での台辞棒に云て情合なし、爺よの一言いかにも親しく懐しく砕けて柔かに云ふべし。」（「竹の屋劇評集」明治二八年一〇月明治座略評）

矢崎嵯峨の舎

「江戸紫」第一〇編（明治二三年一〇月）に寒唇軒秋風（尾崎紅葉の仮名？）の「文壇名所案内」をのせている。とりあげているのは「かゝずの森」で坪内逍遙、「露西亜ヶ谷」で前半に二葉亭四迷、後半が嵯峨の舎御室である。その後半の全文をあげると、次のようである。

「谷を昇りたる処に掛茶屋あり、屋号を『嵯峨の舎』といふ。名物腐玉子を商ふ。自園精製の茶は初恋といひて最も名代なるものなり。此地も露西亜ヶ谷と呼べど、平地に続きてやゝ小高く四方の眺望に富めり。気候温和にして四時春の如く、淡煙軽花鳥歌蝶舞揺風蕩日殆んど人を酔はしむ。されば縦覧の士女雑閙して頗る繁華を極むること春時の向島に髣髴たり。此谷の間に北邙散士といふ道士住みて隠形の術を能くし、行人を捉へて宇宙主義といふ異教の説法を無理往生に聞かすよし。此店にて近頃手前摺の旅行記を強売するとて評判余りよろしからず。案ずるに『嵯峨のや』は『かゝずの森』の東『おぼろの池』の畔に在りけるを、近年思ふ所ありて此地に移せしものなり。其頃は『守銭奴の原』といふ不潔なる

俗地に接し、仕入の『一節切』を商ひ、極々可哀なるものなりしが、今の地に移りて以来、老舗の大家となりて屈指の名所とはなれり。」

文中いうところの北邙散士は、矢崎嵯峨の舎の別号。「かゝずの森」「おぼろの池」は坪内逍遙（春の舎おぼろ）をさし、嵯峨の舎がその弟分として文界に登場したことを意味する。その処女作は『守銭奴の肚』（明治二〇年一月刊）であり、逍遙の序を付して出た。吝嗇な質屋の主人が一ぱい食う話で、戯作調の凡作である。つづく第二作「ひとよ切」（明治二〇年一二月）は、大晦日の一日におけるいろいろな職業の人の心情や生活を並べたてて、作意は西鶴の「胸算用」に似ているが、これまたあざとい愚作にすぎない。だから「極々可哀」な存在だったにすぎない。ところが二三年ごろには「老舗の大家」となり、二葉亭と比肩する位置を占めていることが、以上によって明らかである。

また二四年秋の東京新報では、当時売り出しの尾崎紅葉と彼が並称して論ぜられていた。（江見水蔭『自己中心明治文壇史』）彼を有名にしたのは「初恋」（明治二二年一月）であり、つづいて「くされたまご」（同二月）、「野末の菊」（同七月）、「流転」（同八月）と佳作が続出した。今日からふりかえって見ると、芸術的に彼を代表すべき作品は、すべて明治二二年中のものにかかわり、以後はほとんどいうに足りない。しかしそのころの彼の潔白清麗で可憐な小説は、初期浪漫精神の開花というべきものであった。

彼の特徴は宗教あるいは道徳にとらわれることが多く、作風はしばしば概念的・教訓的に流れて、作家として大成するに至らなかった。彼の意味のある文学活動は、たかだか二四、五年までであった。一八年一〇月の樋口一葉の日記は、「我に比べて学才のきはなみなみならざりしさがのやが末のはかなきこと」を嘆じているのである。

嵯峨の舎は関宿の城主、久世氏の臣を父として、江戸の藩邸に生まれた。半自叙伝的作品「我家」（明治三二年一二月）によれば、佐幕党に属した彼の父は、維新後、失意の境遇にあった。彼は寺にあずけられたり、丁稚奉公をしたりしたが、明治九年外国語学校の給費生となり、そこで二葉亭四迷を知り、この前後から文学をもって身を立てようとした。当時有数の英学者で共立学舎を経営する、尺振八の知遇を得たのもこのころであった。一六年に外国語学校を終え、一時統計院に勤めたが失職し、二葉亭のすすめで逍遙をたずね、その玄関番となって、嵯峨の舎御室の号を与えられたのである。

ところで、先にもいったように、彼の第一、第二作はなすところがなかったが、第三作の『無味気』（明治二一年四月刊）、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com